



Peer Garden

茗溪アルバム

茗溪創基150年記念事業

茗溪150年の思い出を紡ぎませんか？

山男の歌Ⅲ

2月28日(金)14時、祝い酒を手に、茗溪会館5階事務室から、4階「新泉の間」へと階段を下りてしていると、耳に馴染みのある楽曲が聞こえてきた。

虹の都 光の港 キネマの天地

『蒲田行進曲』だが、歌詞が違う。

雪の煙 タンネの樹氷

我等が天地

岩にザイル 壁の氷 蹴破るところ

ピッケルの閃きに 花と散る氷にも

青春燃ゆる 生命は躍る

我等が天地

どうやら、山岳部の『部歌』のようだ。

『蒲田行進曲』(1982年)、古くは、松竹キネマ映画『親父とその子』(1929年)の主題歌主題歌で、原曲があることを知った。

原曲は、ブロードウェイで公演されたオペレッタ「放浪の王者 The Vagabond King」劇中歌の一つ『放浪者の歌 Song of the Vagabonds』で、初演は1925年だから、一世紀前の楽曲である。作曲者は、チェコの音楽家ルドルフ・フリムル (Charles Rudolf Frlm/1879-1972)。

「新泉の間」の扉を開くと、元山岳部員の方々が『部歌』を歌い終え、乾杯に移るところであった。参加者は19名

で、遠く香川や山梨からも参加されていた。

唐沢氏の先輩格が3名いらした。永峯隆夫(S35地理)、蟻川治男(S38林学)、斉藤敬文(S38林学)の3氏で、永峯氏が、当日参加者の最年長であった。

お邪魔した折に、久々の会合ということで「おめでとうございます」とお声がけしたが、「なにがおめでたいんだか」という応答に、笑いをおきた。



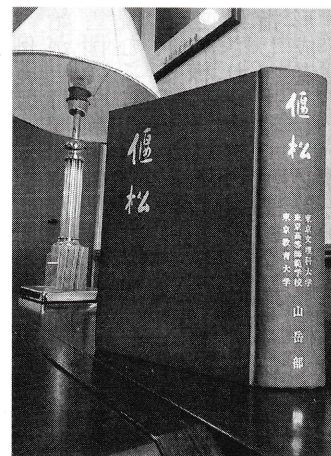
秋山富雄氏のメール(2025/3/9)に、「東京教育大学山岳部OB会『終活の最後』を意識して企画しました。これでお仕舞いご理解ください」と、記されていた。

● 思いがけぬ反響

季刊誌『茗溪』秋号と正月号に連載した「山男の歌」が、思わぬ反響を得た。

記事を目にした山岳部OBが、茗溪会館で会合を開くことにしたという連絡をいただいた。

もう一つは、柴田徹氏(S46地鯨)が『偃松』をわざわざ届けてくれた。不在でお会いできず、電話にて、謝意をお伝えした。



B5版1100ページの大冊である。

この大冊が作られた目的は、「わが山岳部は消滅した。そしていずれかはOB会も消滅する。しかし、偃松五〇年史は残る」と「あとがき」に記す思いにある。

編集作業が始まったのは、昭和57(1982)年頃で、「集められた膨大な資料をすべてコピーし、手分けしてそれを読み取捨選択するという苦しくも楽しい作業」が、ほぼ2年間にわたって続けられ、その間、一、二か月に一回ほどの編集打合せが行われたということがある。

『偃松五〇年史』は、大正12(1923)年の山岳会創設に始まり、昭和53(1978)年の「東京教育大学の廃学」とともに終わっている。

● 山岳会創設の頃

「東京高等師範学校山岳会創設趣意書」(大正12年度)がある。

・山嶽の雄大なる形に接し、高峻なる連峰を突破することにより、豪壮なる意気と勇往邁進の気象を養い合わせて広大なる度量を養うこと……

・登山旅行によりて見分を広め、合わせて学術的知識を獲得すること
・高雅なる趣味の涵養

大正12年、この年、加藤友三郎内閣が東京文理科大学設置案を含む予算案を第46帝議會通常會に再提出し、文理科大学の設立が貴衆兩議院で可決した。

その4年前の大正8(1919)年師走、師範大學構想を掲げ、「昇格か、廃校か」の覚悟の下に、東京高師の学生、教職員、そして、同窓が「母校昇格運動」を起こした。宣揚歌『桐の葉』は、この運動の中で作られた。

山岳會が創設されたのは、師範大學構想を掲げた母校昇格運動が、ようやく実を結びかけた年でもあった。

だが、その年の夏、加藤首相は急逝し、一週間後の9月初日(土)の昼時に、関東大震災が起きた。東京、神奈川を中心に罹災し、死者や行方不明者は夥しい数に及んだ。

東京高師の昇格事業は、6カ年の継続事業として実施されるはずであったが、震災による繰り延べで、当初より4年遅れた1927年度に、5カ年の継続事業として実施されることとなった。

勅令第37号(官立文理科大学官制)により、東京文理科大学が設立されたのは、元号も変わって昭和4(1929)年、世界恐慌の年でもあった。

● 山岳會 草創期の活動

最初の登攀は、7月、2班に分かれて白馬と富士、そして蝦夷富士であった。

「登山にて準備すべき事」として、草鞋(三足あれば十分)、帽子(広いもの冷しく良ろし)、金剛杖(必要)……カンジキ(鉄製)が明記され、富士登山の項目には、「足にはゴム底に足袋か、または草鞋がよい」(同書p17)と記されていた。

● 山岳會が山岳部に昇格する

山岳會から學友會登山部に昇格したのは昭和7年であった。ようやく高まつてきた學校登山の機運を逃さず、中等學校の登山行事は、指導者、引率者はすべて教師である。一人でも多くの山の経験を持ち、山の広い知識を持った教師を學校に送らなければならない。それには……と、學友會の幹事や各部主事に説いて回ったことが功を奏したようである。(長津一郎「山岳部ことはじめ」同書p3)

黎明期の學校登山を牽引した教育者に、同窓であり、信濃教育に大きな足跡を残した渡辺敏(1847-1930)がいる。

渡辺は、信仰登山の時代に、登山をスポーツとして捉え、學校登山を推進した。

このことは、記憶に留めたい。

● 雪の煙 タンネの樹氷 我等が天地

4月1日 晴のち吹雪

「この日、東京では午前中は晴れていたが、午後2時頃猛烈な雷雨があり、あたりが夜のように暗くなった。谷川でも天神小屋の管理人の話では午前中は晴れていたが、正午過ぎより激しい吹雪となったという。当日、日本上空を大きな低気圧が過ぎ寒冷前線に伴う天気の変化は不幸な結果を招いた。……小屋の8畳には二組の布団が敷かれたままでサントリーの丸瓶が彼らの帰りを待っていた。小屋日誌には兩名がシンセン東尾根に行く旨が簡単に記されていた。」(永峯隆夫「事故発生当時の情況」『偃松』8号p3)

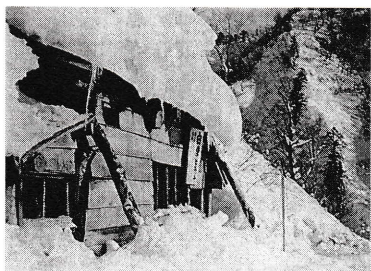
唐沢と同時期に入部した榊泰明が松下信明(S39動物)と谷川岳シンセン尾根で遭難(1965/4/1)した。

唐沢が入学した年の正月に、隈部研二が白馬岳三合尾根で遭難(1962/1/2)し、入部後も、搜索は続いていた。

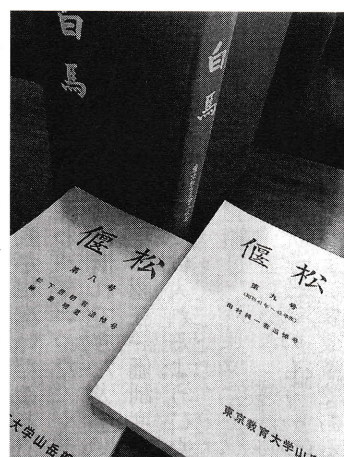
「山岳部の歴史は(遭難の歴史)でもあった。大きな事故を3回経験。計4名の岳友を失った」(唐沢孝一「東京教育大學山岳部、活動の記録(メモ)」)

隈部研二の追悼は、『白馬』の出版となり、松下信明と榊泰明の追悼は、『偃松』8号に特集された。

唐沢の卒業後、2年の日田村純一が、西穂間ノ岳で遭難(1967/12/28)した。『偃松』9号が追悼号となった。



『部歌』作詞者の新谷茂氏は、山岳部員番号1番、白樺ヒュッテ開設(昭和5年11月)の頃で、『蒲田行進曲』は大流行歌となっていたと想像できます。秋山富雄氏のメール(2025/3/9)より
写真:湯檜曾川奥白樺尾根末端に建設された東京高等師範學校山岳部白樺ヒュッテと跡地『偃松』p9所載)



『部歌』の原曲は、同じメロディーが繰り返され、フェードアウトしていく。
雪の煙 タンネの樹氷
我等が天地……

地吹雪が舞い、部員の姿が雪煙に霞む。急峻に歩を進めながら口ずさむ。
青春燃ゆる 生命は躍る
我等が天地……